

1, 2歳児をもつ母親の遊び歌に対する意識

西海聡子*

1. はじめに

子育てに遊び歌りは生きているだろうか。遊び歌のなかには、「いっぼんぼしこちょこちょ」など、母親が赤ちゃんをあやすための遊びが豊富にある。民俗音楽研究家、尾原昭夫によれば、遊び歌の歴史は古く、室町時代に始まったとされる狂言の一場面にも遊び歌は出てくるし、「にぎにぎ」や「ちょちょちアワワ」等の遊び歌は江戸時代の記録にも残っているという²⁾。このように、日本において、赤ちゃんをあやすための歌や遊びは、古くから子育てに使われてきたことがわかる。

また、諸外国においても多くの民族が遊び歌をもっている。英語圏においては‘ナーサリーライム’‘マザーグース’と呼ばれる遊び歌の一群があり、現在でも脈々と受け継がれている。

音楽教育に関する国際研究組織である、国際音楽教育協会 (International Society for Music Education, 略して ISME) の幼児教育専門部会 (Early Childhood Music Education Commission) における、最近のひとつの動向として、0歳から3歳までの乳幼児と母親の音楽教育についての研究が盛んになってきている³⁾。近代工業国において、以前は、祖母や母から自然に口伝されていた伝承的な遊び歌は、核家族化や少子化等の社会変化によって、現在の家庭内ではあまり遊ば

れなくなっている。しかし、近年、唱え歌や伝承的な遊び歌の価値が再認識されつつあり、それらを親子の遊びの中にどう取り戻していくかが課題となっている

日本においても、状況は同じであろう。100余年前、西洋音楽が日本に移入された時、「わらべうたは卑俗なものである」と教育から排除した歴史の経緯や社会の急激な変化は、伝承的な遊び歌を衰退させた。若い母親においては、遊び歌を知らない、遊べない母親が増えているのではないかと考えられる。

筆者は、乳幼児期に遊び歌で遊ぶことは、乳幼児の言語、知性、情緒等の発達を促しているのではないかと考えている。また、親子の愛情の絆を深めるものでもあるだろう。親子での遊び歌を考察していくのにあたり、遊び歌に関する母親の意識と、遊び歌での遊びの実態を知ることを目的とする面接調査を行うこととした。

2. 方法

調査の対象者は、長野市内の子育てサークルに所属している1, 2歳児をもつ母親30名である。遊び歌に関する母親の意識と、遊び歌での遊びの実態を問う内容のチェックシートを作成し、調査者が対象者にチェックシートにそって質問をして回答を得た。この調査では、対象者を個別に面接して結果を得ることで、質問紙調査ではすくい取れない詳細を訊くことを目的とした。面接調査は、

*干380 長野市三輪8-49-7 長野県短期大学

平成9年6月に行った。

対象者の年齢構成は、25歳以下が3名10%、26歳以上30歳以下が12名40%、31歳以上35歳以下が14名47%、36歳以上が1名である。子どもの年齢(複数回答)は、0歳児をもつ母親が4名、1歳児をもつ母親が14名、2歳児をもつ母親が10名、3歳児をもつ母親が2名であった。

家族形態に関しては、25名が核家族であり、祖父・祖母との同居はわずか5名であった。職業に関しては、30名全員が主婦である。

3. 結果及び考察

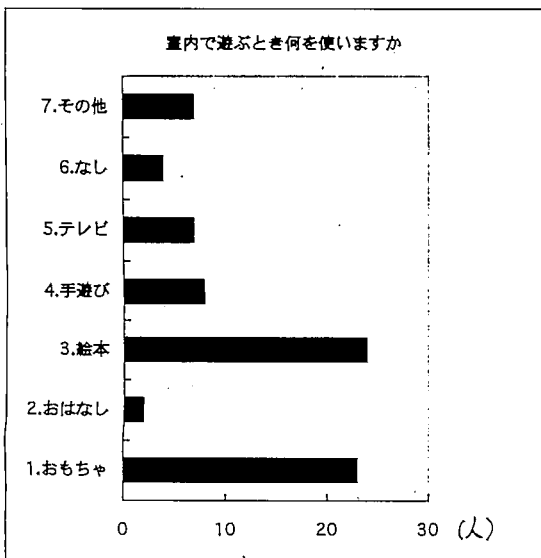
3-1 子どもとの遊び

母親は、日々の生活のなかで、子どもとよく遊んでいるか、について尋ねたところ(表1)「大

表1

①あなたはお子さんとよく遊びますか	人数
1.大変よく遊ぶ	2
2.よく遊ぶ	19
3.ときどき遊ぶ	8
4.あまり遊ばない	0
5.全然遊ばない	0
合計	30

図1



変よく遊ぶ」2名、「よく遊ぶ」19名、「時々遊ぶ」8名、「あまり遊ばない」「全然遊ばない」は共に0名であった。多くの母親が子どもとよく遊んでいることがわかる。室内で子どもと遊ぶ時、主に何を使って遊ぶか(図1)に関しては、「絵本」24名、「おもちゃ」23名、とそれぞれが半数以上の回答を得てよく使われていることがわかる。「手遊び」8名、「テレビ」7名、「おはなし」2名、がそれに続いている。

3-2 遊び歌での遊び

遊び歌で遊んでいるかを尋ねた(表2)。「時々遊ぶ」17名57%、が最多数であった。「大変よく遊ぶ」2名、「よく遊ぶ」9名、「あまり遊ばない」「全然遊ばない」が各1名。遊ばない理由については、「興味がないから」1名、「遊びを知らないから」が1名であった。

遊び歌で遊ぶのはどんな時だろうか(図2)。複数回答であげてもらった。「時間に余裕がある時」24名、「入浴時」10名、「車の中で」11名、「泣いたりぐずっている時」10名、「甘えてきた時」12名、が共通して多くあげられたものである。続いて「就寝時」5名、「テレビを見ながら」5名、「着替えの時」3名、と多様な状況や用途に応じて利用されている実態が伺える。

多くの母親が、遊び歌を子どもに遊んであげたいという気持ちはあっても、なかなか思うように時間がとれない、というのが現状のようである。従って、母親自身の「時間に余裕のある時」が最多の回答であった。

表2

遊び歌でよく遊ぶか	人数
1.大変よく遊ぶ	2
2.よく遊ぶ	9
3.ときどき遊ぶ	17
4.あまり遊ばない	1
5.全然遊ばない	1
合計	30

図2

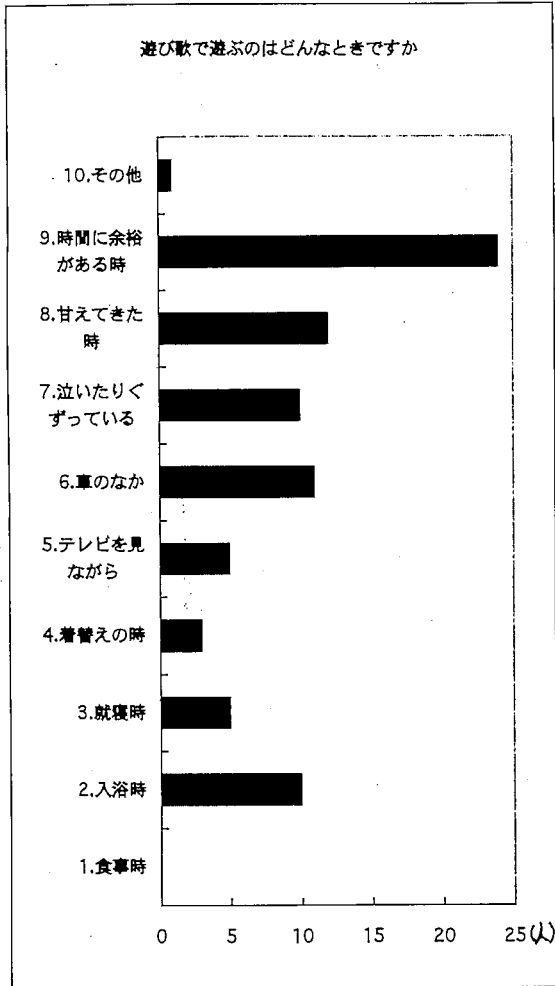
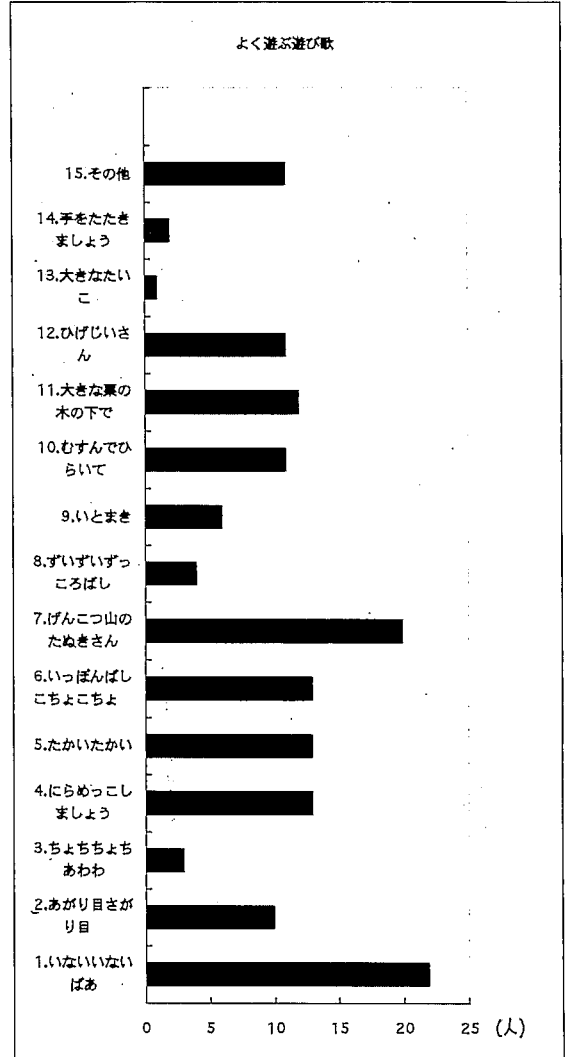


図3

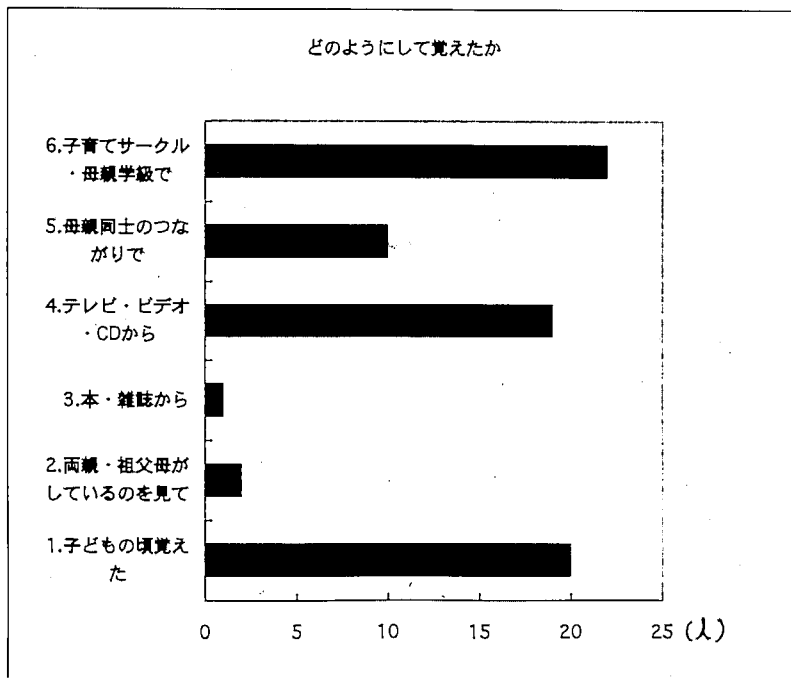


よく遊ぶ遊び歌を具体的にあげてもらった(図3)。7割程度の母親があげた曲名として「いいいいない、ばあ」「げんこつ山のたぬきさん」。約半数の人があげた曲名として「あがり目さがり目」「ならめっこ」「たかいたかい」「いっぽんばしこちょこちょ」「むすんでひらいて」「大きな栗の木の下で」「ひげじいさん」等があった。全体としては、従来からある手遊びに人気があるようだ。「いいいいない、ばあ」「げんこつ山のたぬきさん」「あがり目さがり目」などの伝承的な遊び歌も、よく受け継がれていることがわかる。同じ

表3

子どもの反応は	人数
1. 大変喜ぶ	12
2. 笑顔でよろこぶ	18
3. 反応なし	0
4. つまらなそう	0
5. いやがる	0
合計	30

図 4



曲名が多くあがる点からは、子育て向けのレパートリーが定着していることが伺える。

よく遊ぶ遊び歌としてあげてもらった遊び歌の、ひとり平均の個数は4.5個であった。しかし、多くを知っている人は10個以上をあげ、遊び歌を豊富に知っている人と知らない人とが二分する形であった。

遊び歌で遊んだときの子どもの反応について訊いた(表3)。「何回も繰り返してと要求するほど喜ぶ」12名、「笑顔で喜ぶ」18名、と全員が、子どもたちは遊び歌を喜んで受けとめていることを指摘している。多くの母親が「やってあげると本当ににうれしそうな顔をする」と答えた。

では、母親はどのようにして遊び歌を覚えたのであろうか。遊び歌の学習経路について複数回答であげてもらった(図4)。

最多は「子育てサークル・母親学級で」22名であった。続いて、「子どもの頃覚えた」20名、「テレビ・ビデオ・CDから」19名、「母親どうしのつ

ながりで」10名、「両親・祖父母がしているのを見て」2名であった。「子育てサークル・母親学級で」との回答が最多であったことは興味深い。回答者全員が子育てサークルに所属している点から、回答の偏りも予想され、その点は考慮すべきであるが、子育てサークルや母親学級等が、現代の育児を支えるひとつの情報源になっているということは言えるのではないだろうか。「テレビ・ビデオ・CDから」という母親も多く、現在の社会状況の反映とも受けとれる。とりわけ、テレビ番組「お母さんといっしょ」の影響は大きいようだ。

従来、伝承的な遊びや歌は、年長者から子どもへ、また、子ども同士で自然に伝えあってきたものである。また、近所に子どもをあやすのが上手い大人がいて、それを見て母親が覚える等、地域的な繋がりの中での伝承もあったであろう。「子どもの頃覚えた」という回答も20名からあった。母親が子どもの頃は、遊び歌の伝承が、現在よりもなされていたのかもしれない。しかし、その時

に覚えたものを、子どもにしてあげるには、歌詞や遊び方が不明確で、やってあげられないとの声もあった。

3-3 歌の歌いかけ

母親が子どもに歌を歌いかけたり一緒に歌うことも、子どもへの音楽的な働きかけである、という点において、遊び歌と共通の役割りをもつ。

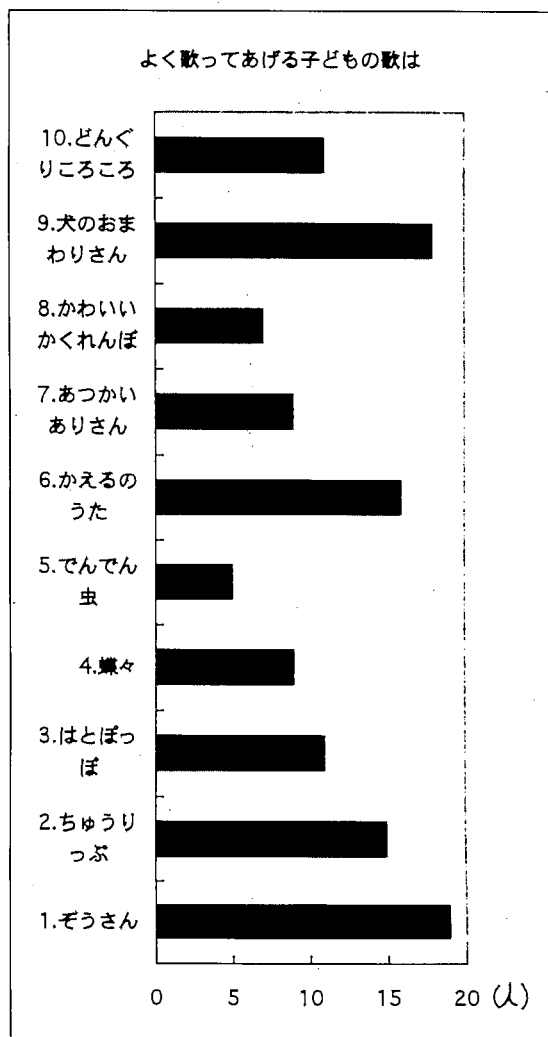
そこで、家庭で子どもに歌を歌っているかどうかを尋ねた(表4)。「大変よく歌う」7名23%、「良く歌う」14名47%、「時々歌う」9名30%であった。「大変よく歌う」と「よく歌う」との回答を合わせると21名であり、全体の3分の2を占める多くの母親が、子どもに歌を歌いかけていることがわかる。表2「遊び歌でよく遊ぶか」の問いでは、「大変よく遊ぶ」と「よく遊ぶ」を合わせた数は11名で、全体の3分の1である。今回の結果においては、遊び歌で遊ぶことよりも、歌を歌いかけることの方が多くの母親によって行われている、といえる。どちらも子どもの成長にとって大切なものであろうが、歌を歌いかけることの方が、母親は馴染みのある音楽行動のようであった。「子どもの歌には、良い歌がたくさんあるので、子どもに多くを伝えたい」「歌を歌うと気持ちが晴れやかになるので、歌うことは大好きである」等、歌うことに積極的な母親も多かった。

歌う頻度の高い曲名を訊いた(図5)。半数以上の母親によってあげられた曲は「ぞうさん」19名、「犬のおまわりさん」18名、「かえるのうた」16名、「ちゅうりっぷ」15名であった。「かえるのうた」に関しては、調査時期からの影響もうかがえるが、どれもよく知られた童謡であり、子どもの歌である。他に、「はとぼっぼ」「どんぐりころころ」が共に11名、「ちょうちょう」「おつかいありさん」が9名、「かわいいかくれんぼ」7名、「でんでんむし」5名等があがった。ここでも、多くの母親が共通の曲目をあげ、母親が子どもに

表4

歌を歌ってあげますか	人数
1.大変よく歌う	7
2.よく歌う	14
3.ときどき歌う	9
4.あまり歌わない	0
5.全然歌わない	0
合計	30

図5



歌いかけている歌のレパートリーが固定されつつある現状が伺える。

テレビの主題歌からは、「ドラエもん」「アンパンマン」「サザエさん」等があがった。また、個人的な回答としては、「さんぽの時は、となりのトトロの‘さんぽ’をロズさんでいる」「流行っている歌謡曲をロズさむ」「替え歌にして楽しんでいる」「自己流で即興的に歌を作って歌っている」「思いつくままに何でも歌う」等があった。

ところで、子どもに歌いかける歌の、典型的な歌のひとつとして、子守歌がある。調査においてあがった子守歌は、「江戸子守歌」5名、「シューベルトの子守歌」4名、「ゆりかごの歌」4名であった。子守歌を歌ってあげたいが、歌いたいと思う子守歌がないという意見が、複数の母親から寄せられた。日本の子守歌は暗い感じがする、また、シューベルトの子守歌やブラームスの子守歌等の芸術歌曲ともいえる子守歌は歌うのに気恥ずかしい、というのである。気持ちに合う子守歌がないので、「七つの子」を子守歌として使っているという母親もいた。子守歌として作られていない歌でも、母親が子守歌として歌いたくなる歌であれば、それでよいと思われるが、気持ち良く歌える子守歌は少ないようだ。その一方、母親が歌いたくなる子守歌の発掘、及び創作は早急な課題であろう。

3-4 遊び歌への意識

遊び歌が子どもに与える影響について尋ねた(図6)。「大変良い影響がある」19名64%、「ある程度よい影響がある」10名33%、合わせて29名という多数の母親が遊び歌は子どものために良い、と認識している。

具体的にどのような良い影響があるかについて訊いた。「スキンシップ、親子のふれあい」に関する回答は16名であった。母子のスキンシップのためには、子どもとの触れ合いが自然に持てる遊

び歌は、格好の素材であろう。「心が豊かになる」「情緒が豊かになる」等、情緒の発達に関する回答は6名である。「ことばが増える」2名、「リズム感が養われる」3名等、諸能力の発達・促進に役立つ点に注目している人もいた。

次に、母親への影響について訊いた(図7)。

図6

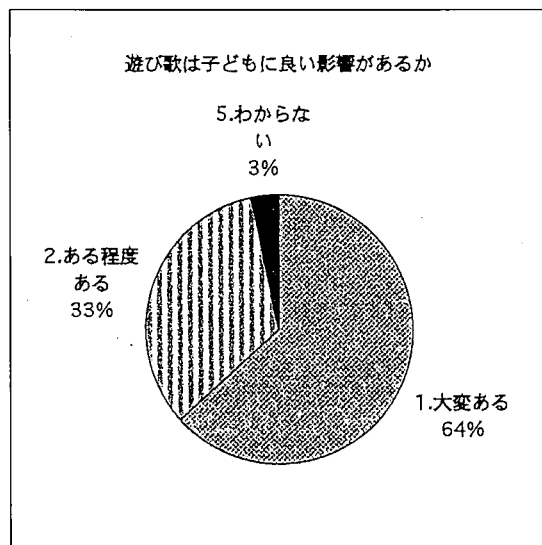
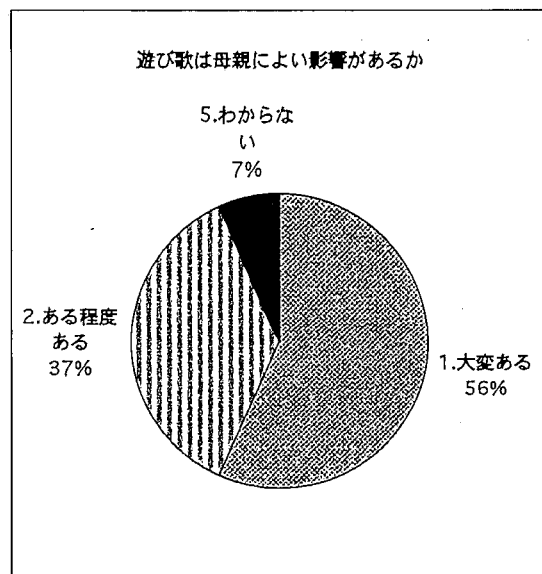


図7



遊び歌と一緒に遊ぶことは母親にもよい影響を与えらると思うか、についての回答として、「大変ある」17名56%、「ある程度よい影響がある」11名37%、「わからない」2名。これも合わせて28名と多く母親が、母親にとっても良い影響があると指摘した。

具体的な影響について訊いた。「楽しい気分になり、心がうきうきする」5名、「気持ちが落ちつく、ゆったりした気持ちになる」4名、「暖かい気持ちになれる」「やさしい気持ちになれる」5名。遊び歌を子どもと楽しむことによって、母親自身の気持ちが良い状態に変わる、保てることを多くの人が指摘した。「ストレス解消」と答えた人も4名あり、遊び歌は、育児のストレスの緩和としての役割も果たしているようである。「子どもの笑顔を見ると、自分も幸せになり、育児を楽しんでできる」「子どもの楽しんでいる様子がわかり、子どもとの一体感が味わえる」「何よりも楽しい」など、遊び歌で遊ぶことを、親子ともに楽しんでいる様子がうかがえた。

4. おわりに

調査からは、多くの母親が遊び歌に対して肯定的なイメージを持ち、子育てにおいて、積極的に利用しているという結果を得た。

しかし、結果においては、対象者が少人数であることからの偏りと、全員が主婦であり子育てサ

ークルに入って点においても偏りを予想しなくてはならない。これらは反省すべき点である。今後、これらの反省点を改善した上で、母親の置かれている環境の違い（例えば、核家族と同居家族での違いや、専業主婦と仕事を持っている母親での違い、及び都市部と農村部での違い等）による遊び歌への意識や遊びの実態についても検討を重ねていきたい。

謝辞

本研究の一部は、平成9-10年度の文部省科学研究費補助金（奨励研究(A)）によって進められたことを、感謝をこめて記しておく。

注

- 1) ここでの遊び歌とは、「いっぼんばしこちょこちょ」などの伝承的な遊び歌、最近作られた「いっぼんばし」（湯浅とんぼ作）などの創作的遊び歌のどちらをも含み、歌を伴った遊び全般を指すものとする。
- 2) 尾原昭夫（1991）『近世童謡童遊集』柳原書店
- 3) 近年開催された ISME 幼児部会セミナー（1992年東京、1994年ミズーリ州コロンビア、1996年ウィンチェスター）において、オランダの Marjke Albers & Margre van Gestel の 'Music on the Lap'（膝の上の音楽教育）の一連の研究をはじめとして、0-3歳児を対象とした親子での音楽教育に関する研究は多い。